

# ふじさき歯科 デンタルニュース

2010年 No.18



## 脚気かきの医学史

日本で最も評価の高い医学者は、と聞かれたら私は迷わず、脚気の予防法を発見し、又、慈恵医大を創立した高木兼寛博士を挙げます。

歴史小説「坂の上の雲」によって明治の群像が描かれた日清・日露の戦役当時、日本は西欧に対しあらゆる事に背のびし、海外の知識・技術を取り入れ反芻していた時代だったのだと思います。

この頃、というよりも江戸元禄の時代から日本では脚気が広く蔓延していました。特に富国強兵という軍隊の増強とともに、脚気は兵営で増加し、その対策がとられるようになる大正時代頃まで、日本全国で毎年二万人以上が脚気で死亡していました。日清・日露の戦時には前線将兵のほぼ四分の一が脚気となり、それは総傷病者数の実に二分の一というありさまであったそうです。

脚気の予防は解決しなければならぬ重要な課題だったのです。しかしながら病因については当時、中毒説、細菌伝染説、栄養障害説など、これも、これも論ぜられ、治療の決め手を欠いていました。

陸軍では、ドイツのコッホの下で学んだ軍医森鷗外が細菌原因説を唱えて

おりました。これに対し、イギリスで衛生学を学んできた海軍医総監の高木兼寛は食物原因説を唱え、真つ向からこれと対立しました。

高木はある時、咸臨丸に次ぐ第二次アメリカ訪問の軍艦「筑波」の航海記録の調査で、ある事に気がつきました。それは、洋食を食した乗組員には脚気が出にくいという事です。更に調査を進めると、水兵の食事は現金が支給され、米だけは負担金を支払うが副食は自由意志に任されていたことを知りました。当時は家が貧しい者が多く、水兵の多くは副食代を貯金して故郷に送金していたそうです。脚気は食料事情の良い士官に皆無で、水兵に多く多発する傾向がありました。そこで「筑波」により壮大な実験航海をし、食事による、脚気の予防試験を行ったのです。そして脚気の原因は「栄養バランスが崩れた食物の摂取」と結論しました。



この話は現代の医療の論理、EBM（証拠にもとづく医療）の例として良く引用されており、百年も前の経験医療の時代に、見事にこのような立証をなしたのです。

これにより海軍の脚気患者は激減したのですが、陸軍では森鷗外の死去後まで細菌説を唱え続け、脚気は大正末期まで続いたそうです。

この高木の功績は、その後鈴木梅太郎のオリザンの発見、ポーランドの化学者フンクのビタミンの抽出へと続き、世界的な評価を得ることになりました。

南極大陸には有名なビタミンの研究者や、栄養学者の名前が命名された岬があるようですが、日本では高木のみだそうです。

以上の事は吉村昭著の歴史小説「白い航跡」に詳しく書いてあります。ぜひ御一読を。

それにしても百年程前の日本には、夢・希望・誇り・気概などがあふれかえり、世界的にも認められた人材がなんと多く存在していたのでしょうか。そのような日本に戻る事はもうできないのでしょうか。

院長 歯学博士 藤崎真人